

# どんびま

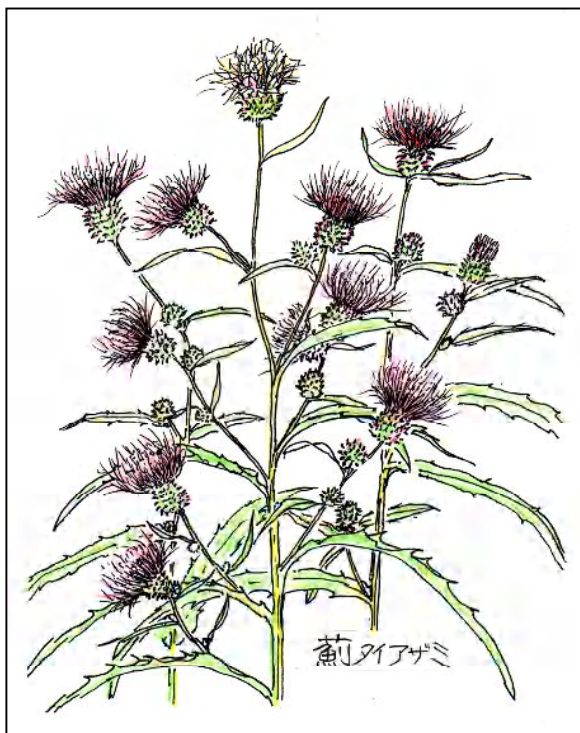
2015年11月12日発行  
発行者 花の湖農業小学校

## 地歌舞伎の楽しみ

東美濃でも恵那地方(恵那市・中津川市)には県下に28団体ある内の、14の歌舞伎保存会があり、全国でも3本の指に入る地歌舞伎の盛んな地域である。坂下歌舞伎保存会は、1966年県下で最初に保存会組織を立ち上げた。今年も11月第2日曜日に第48回公演を開催した。

地歌舞伎は、村の神社への奉納芸を名目に、数少ない娯楽として、教養として、なにより村のコミュニティーとしての共同意識を培う場として伝承されてきた。村の芝居小屋は、村内だけでなく、近隣の村からも観客が集まる社交場で、知り合いの変身振りを楽しみ、見聞きしたものは後の話の種となった。

役者としての歌舞伎の楽しみは、日常を離れて変身できること、浄瑠璃や台詞では日本語の美しい響きを、所作では役の性格や感情を表現する芸の深さを楽しみながら挑戦することにある。子ども歌舞伎も毎年演じられ、農小の卒業生も2人参加出演している。(草)



## 11月授業日のご案内

- 日程 11月29日(日)
  - 受付 9:00~9:30
  - はじめの会 9:30~9:40
  - 授業(収穫) 9:40~12:00
  - 収穫祭(昼食) 12:00~14:00
  - 卒業式 14:00~15:00  
(卒業証書授与)(文集配布)  
(バケツ稲・かかしコンクール表彰)
- 持ち物 手袋、タオル、雨具、着替え  
箸、食器  
レジ袋(有る人はたくさん)
- 卒業記念作品展  
キャンプの物作り教室の作品  
農小の写真・絵  
その他、趣味の作品  
ぜひ、出品してください。
- 郷土料理 ぜんざい、おでん、五平餅ほか
- 締め切り 11月24日(厳守)
- 問い合わせ・緊急連絡 TEL:0573-75-4417・FAX:0573-75-4418  
携帯:090-5110-9362 (山内総太郎)

☆29日に欠席の人のために、12月5日(土)午前11時から12時まで、野菜の収穫と、卒業証書をお渡しします。お出かけの方は、事務局まで必ずご連絡下さい。

## ～農小レポート～

# 昔の脱穀作業と玄米になる所を見ました

久しぶりに快晴に恵まれ、日本百名山2190メートル、中央アルプス最南端の恵那山を望みながらの、10月授業日となりました。農家にとっては一年間の収穫を占う脱穀を、農小でも体験することができました。

### 1 午前の授業。

畑の仕事。落花生の収穫と枝豆の収穫、かつて父兄の中でも、落花生が土の中で育つ事を知らない人もいました。今年も生徒の中に土の中の落花生を見て、驚いていた人もいたようでした。落花生は字の如く花が咲き終わると、莖が地面に落ちて土に潜り中で育ちます。

2 昼食。 栗ご飯、豚汁、すぐり菜のごま和え、人参とカラムーチョのマヨネーズあえ、大根サラダ2種。 先月は茸で今月は栗と、秋の味覚を味わう事ができました。

### 3 午後の授業。

脱穀。 昔ながらの手作業のセンバ（千歯）とかコバシとか云われる器具を使っての稲落とし、足踏み脱穀機での脱穀とを体験しました。そのあと今年初めて小型籾摺り機により、玄米になる所を目の当りにする事ができました。

したがって今年は一升瓶による精米は、玄米から始める事になりました。

はたして何分搗きまで頑張れるでしょうか？

### 4 案山子の片付け。

椀の湖農小の案山子は、今年も多くのカメラマンの被写体としての、役目を終えましたので、来年へのアイデアを秘めて、中身を分別しながら解体されました。

5 持ち帰り。 落花生、枝豆、かぶの抜き菜。焼きいもは父兄にも支給されました。生芋は11月の持ち帰りとなります。

## ～とくちゃんのちょっと一言～

この時期になると思い出す事があり、今年は特に印象深いものがあった。何故かと言うと小型ながら籾摺り機にお目に掛かったからである。スタッフのマナちゃんが手に入れて来たものですが、ずいぶん懐かしい機械であって、近年見ることは殆んど無いのである。

半世紀も前の自分が未だ農業をしていた頃、二十数軒の農家が共同で購入した大型籾摺り機のオペレーターをしていた。「臼引き」と称して農家にとっては、一年中で一番楽しみな日でもあった。それは苦勞の使役が米の石高によって示されるので、天候加減等で毎年出来高が違い、一喜一憂しながらも祭り気分になれる時だからである。

一つ困った事は、一日約二軒の農家を回ると、昼食と夕食に有り付くのであるが、どの家の晩餐も同じ秋刀魚飯で有った。当時の秋刀魚は貴重でした。（この話は何回目かな???)

～あぼ兄の百姓ばなし～

## たまごかけご飯

「平飼い鶏の朝採れ 絶品たまごかけご飯」10月19日、新聞1ページ全面広告におどろいた。昭和の時代から、日本の朝ご飯の定番として君臨してきたたまごかけご飯。しかしながら近年は、「生産者の顔が見えない」「生食では少し不安」「信頼できる生産者になかなか出合えない」などの理由で、たまごかけご飯を敬遠している人も多いと聞く。

そんな中、「たまごかけご飯専用」として高い支持を得てきた卵があるという。それが鳥取県八頭町、大江ノ郷自然牧場のこだわり卵「天美卵」だ。そのこだわりは、鶏の飼育方法・餌・水・鮮度そして環境に至るまで隅々にまで亘っているという。

卵は物価の優等生と言われ、1パック100円が相場になっているが、「天美卵」は1個100円で、全国から注文が殺到しているという。市販の卵は流通に数日かかることが多いが、「天美卵」はその日に産んだ卵のみを直接消費者に発送する採卵当日直送方式だが、毎日産まれる卵は予約でいっぱいだから、ストックはいつもゼロだという。

大規模化した養鶏場は、機械化が進み、太陽光を遮断し、空調は全自動。しかも、ニワトリは小さなゲージの中に5、6羽押し込められて飼育されており、まるで卵生産工場だ。それに比べて平飼いは開放的な広い場で走ったり、砂浴びしたり、自然のままにのびのびと育つ。安全を考えた餌と水を与えられて、卵は濃厚なコクと甘みがある。

あぼ兄の近所の80歳になるばあ様から卵をもらった。昔ながらの味がした。話を聞くと、農小の近くの養鶏場で卵を産まなくなった廃鶏をもらってきて、自宅の畑地に柵をはって飼ったところ卵を産むようになり、4人家族で余ったのはケーキにしたり、他人にあげるのだという。昔の農家は何処も家畜がいた。牛は農耕と肥料作りのために、ニワトリやウサギは卵・肉に、鯉は来客やめでたい時の食材になった。ニワトリは家の周りを自由に歩き回って土の中のミミズや虫、草なども食べていた。夜になる前に小屋へ入れるのは子どもの仕事で、遊びに夢中で忘れてしまうと、キツネや野犬にとられてしまうこともあった。あの頃の卵は本当に美味しかった。ただ、ニワトリは毎日卵を産んでも、毎日食べられるものではなかった。農家にとっては米と同様に魚や現金に換えるものだったから。あぼ兄の家では弟たちが病気になると、卵とリンゴとサイダーがでた。丈夫なあぼ兄は、たまには病気になりたいと思ったものだった。

農小にも縁の深い、信州大学名誉教授だった故玉井袈裟男先生から頂いた詩がある。

貧しく育った「私」は 「卵は売るものだと思っていたのです」。母をなじって出してもらった卵をすねて食べず、母を泣かせてしまったことをずっと後悔している「私」は 「70歳になった今でも 生卵割る時に 少しばかり心がゆれるのです」。だから分かるのである「貧しき者は幸いなるかな 卵一つの幸せです」。

農小では、古谷和巳先生と事務局の山内さんは、ずっと前からニワトリを飼っている。授業の後、切り落とされたダイコンの葉などをニワトリの餌に持って帰っていた。古谷先生は、毎年卵を孵化させて、農小へヒヨコを持ってきて見せてくれたこともあった。

耕作放棄地を見ると、ここでニワトリを平飼いすれば、正に一石二鳥だといつも思う。

あぼ兄は長いこと、朝食は炊きたてご飯に卵・味噌汁・漬物、時々納豆が定番である。

# ～かなちゃんの虫日記～

ここ2週間くらい晴くん(1才1ヶ月の息子)は車やバイク、電車など乗り物が大好きです。午時に孝父えたわけではないのに、あちこちで見かけて「ブー」と言っ立止まソタイヤにしがみつきます。なんで好きになったのかとても不思議です。でも、何かを好きになるきっかけは人それぞれですよね。

赤い虫を大好きになったきっかけは大学の課題(宿題みたいなもの)でした。それは「11月25種の昆虫標本」でした。(目はトンボ目、チョウ目、カメシジミなどなど)近い仲間に分けたグループ。種はさらに糸田かく分けて、子とをもり混ぜるグループ)自分で虫をつかまえて、はねや足の形を整えて、ラベルを書いて、金針で箱にさしていく、というものです。できあがるまで、いつもあみと虫を(まじ)缶を持ち歩き、虫をつかまえました。虫が集まるにつれてどんどん好きになりました。目がくりくりしていたり、色がきれいなったり、足の太さがかわいらしかったり... きっかけはマダラアシゾウムシでした。はねがかたすぎで、まったく金針がささらないんです! 思いもよらない固さに感動しました。いろんなのがいる、という多様性に感動しました。そして大好きになりました。

地球上には多付けられている虫が100~120万種いるそうです。また多付けられていない発見されていない虫は500万~1000万とか3000万~5000万種いると言われています!!!!

とろろで集むるをした人はゾウムシの幼虫に出くわしたかもしれませんが、栗の中から出てくるクリーク色の虫(クワガタ)は、まじとクリキゾウムシの幼虫です。長い口を使って実をほじって実の中に卵をうみつけ、幼虫は中で実を食べてコロコロに太ります。大きくなると、実は木から落ち、幼虫は外に出て土の中でさなぎになって冬をこし、初夏に成虫があらわれます。ゾウムシは象虫です。鼻が長いよな顔をしています。虫は鼻はないので、人でいうとくちむりにあたる部分(吻)が長いんです。

